



TITLE:

Verbreitung der lymphatischen Apparate im
extrahepatischen Gallensystem der Primaten nebst
Bemerkungen über ihr Verhältnis zu Lymphgefäßen(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Kitagaki, Tsunehisa

CITATION:

Kitagaki, Tsunehisa. Verbreitung der lymphatischen Apparate im extrahepatischen Gallensystem der Primaten nebst Bemerkungen über ihr Verhältnis zu Lymphgefäßen. 京都大学, 1966, 医学博士

ISSUE DATE:

1966-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212025>

RIGHT:

氏 名	北 垣 倫 央
	きた がき つね ひさ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 328 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Verbreitung der lymphatischen Apparate im extrahepatischen Gallensystem der Primaten nebst Bemerkungen über ihr Verhältnis zu Lymphgefäßen (霊長類胆道系におけるリンパ装置の分布ならびにリンパ管との関係) (主 査)
論文調査委員	教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

本研究において、著者は、一連の霊長類、すなわち尾長猿、赤毛猿、日本猿の成熟例、および成人で、肝外胆道系におけるリンパ装置の構造と分布を、連続切片標本を通じ、組織測定的ならびに比較解剖学的に追求精査、つぎの成績を得た。

1) 一般に霊長類胆道系では、リンパ浸潤あるいは孤立小節の形をとって、リンパ装置の造生をみとめ、小節組織には、しばしば二次小節の形成や明中心の分化を伴う。

2) 霊長類胆道系で、本装置の分布状態を通覧すると、先ず猿類では、胆嚢域、特にその体部に当って、集中的な発達を遂げ、ここから胆幹管域、すなわち、胆嚢管、肝管および総胆管の方へ向って漸減分散する。成人の胆道系においては、本装置の発育が、猿類のそれに比較して質量ともに、遙かに低調であるが、しかし、その分布様式は基本的に一致する。また、霊長類にみる、かかるリンパ装置の発育容姿は、文献によると、それ以下の一般哺乳動物のそれと軌を等しくする(大賀美)。

3) 肝外胆道壁のリンパ装置は、出現層位について、顕著な比較解剖学的推移を示す。胆道系のうち、胆嚢では、霊長類およびそれ以下の哺乳動物を通じ、粘膜固有層の結合組織に局限して、リンパ装置造生をみとめるが、胆管の領域では、趣を異にし、一般哺乳動物で、粘膜固有層に局在する本装置は、猿類になると、線維筋層のみに現われ、さらに人類においては、管壁外膜に、限局的な、分布発達を示す。このように、胆管系リンパ装置の形成は、動物が高等になるにつれて漸次、外方に向って移動転位する。

4) 一例平均にみた、肝外胆道系全域におけるリンパ装置の発育度を、文献的に、比較検討するに、一般哺乳動物のうち、草食類で1%, 肉食類では81%の比率を占めて、また猿類では13%, 成人においては5%の割合となる。すなわち、霊長類胆道系におけるリンパ装置の発達状態は、草食動物と肉食動物との中間に位置するものとみなされる。

5) なお、被検猿類のうち、日本猿において、胸管および右リンパ幹管の結紮実験を通じ、胆道系リンパ装置と脉管系との関連組織像を観察すると、本装置は、血管のみに附随して現われるものが圧倒的多数

を占め、リンパ管に接存すると同時に血管にも沿うものの分布は、概して低調である。しかしながら、リンパ管系のみに専属するリンパ装置の存在は、本例胆道系については確認しがたい。

論文審査の結果の要旨

著者はヒトを含めた霊長類の胆道系リンパ組織の分布を調べ比較解剖学的な検討を行なった。結果つぎの結論をえた。

1) 出現リンパ組織はリンパ浸潤またはリンパ小節で、後者にはしばしば明中心をも含む二次小節の発現を認めた。

2) リンパ組織の分布態度は胆嚢壁にもっとも集中的に現われ、それから胆嚢管、肝管および総胆管に向って漸減する。

これは、一般哺乳類における分布の様式とその軌を一にする。

3) しかしながら胆道壁における分布層位および分布密度には比較解剖学上重要な相違がみとめられる。すなわちリンパ組織の分布は動物が高等になるにつれて粘膜固有層から筋層へと漸次外方に移動する。また、分布密度は一般に肉食動物に高く、草食動物に低く顕著な対比を示すが、霊長類ではその中間に位する。

4) 出現リンパ組織の血管、リンパ管との関係は、血管壁に随伴するものが大部分で、少数は血管およびリンパ管壁両者にまたがって出現し、これには動物間の差は認められなかった。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。